

世界中のすべての人々が傷つけ合うことなくみんな幸せに、子どもと自然がのびのびと

# 子ども と 自然 学会通信

2014年3月7日発行 56 (vol.11 no.6)

*Society of the Child and Nature*

発行：子どもと自然学会＝日本学術会議協力学術研究団体

- 目次 第7回思いを語る会湘南集会案内(2)  
藤岡貞彦・岩田好宏対談「生きることと学ぶこと」(4)  
資料／子どもと自然学会これまでとこれから (7)  
映画『永遠の0』批判(15)  
江ノ島の地形と地震地形(23)

## 第7回思いを語る会湘南集会

開催期日 2014年 4月26日(土)  
～4月27日(日)

開催会場：湘南学園小学校

シンポジウム (藤岡・岩田対談)

「生きることと学ぶこと」

思いを語ろうー子どもと自然学会のこれからについて  
(拡大理事会)

詳しくは p.2 からをご覧ください。要申し込み。

子どもと自然学会  
第7回 思いを語る会

# 湘南集会の案内

1. 開催期日 2014年4月26日(土)・27日(日)
2. 開催会場 湘南学園小学校 神奈川県藤沢市鶴沼松ヶ岡 4-1-32
3. 日程

## 4月26日(土)

第一日目の参加は非会員  
も大歓迎!!

	13:00	14:00	17:00	18:00	20:00
湘南 学園 施設 見学		シンポジウム (藤岡・岩田対談) [生きることと 学ぶこと]	移 動	懇 親 会	各自 宿舎 へ

## 4月27日(日)

9:00

12:00

思いを語ろうー子ども  
と自然学会のこれから  
について(拡大理事会)

\*会場へのアクセス

最寄駅：小田急江ノ島線 鶴沼海岸駅徒歩8分

・江ノ電 鶴沼駅徒歩8分 / いづれもJR 東海道線

藤沢駅経由

横浜から各駅へは片道約35分、600円弱

## 4. 参加費 無料

### ○湘南集会の主な内容

#### 1. シンポジウム 藤岡貞彦・岩田好宏対談

社会教育研究者で、会場校の元学園長でもある藤岡貞彦氏と生物教育研究者で、本学会顧問の岩田好宏氏のお二人に「生きることと学ぶこと」をテーマに対談していただきます。

お二人の親交の深さについては、学会関係者の間では衆知の事実ですが、公での対談は初めてと聞いています。別ページの、岩田氏から藤岡氏への、また藤岡氏から岩田氏への質問をスタートに対談は進行しますが、どれもがきわめて興味深い内容です。お二人がどのように答え、そのお話がどのように展開していくのか、本学会のこれからの研究にとって貴重な対談となるはずです。

ぜひともご期待下さい。

#### 2. 子どもと自然学会のこれからについて思いを語ろう(第2日目)

拡大理事会を兼ねます。理事以外の会員の参加大歓迎です。

- ・第21回北海道釧路大会のみどころ(大森)
- ・その後の研究大会の見通しについて(生源寺・吉岡)
- ・研究推進について(石渡) ・HPの活用 ・その他 存続可否検討など

3. フィールドワーク 特に設定はしませんが、玉生さんからの紹介のように江ノ島は地質・地形に非常に魅力に富んだ所です。1日目の午前中や2日目の午後を利用できる人は、紹介資料を活用して各自で探索してみてください。

4. 懇親会 第1日目の対談者の藤岡さん、岩田さんを囲んでさらに熱く語り合しましょう。会場は当日お知らせします。

### ○事前申込みを

当日参加も OK ですが、シンポジウム会場や懇親会会場準備の関係でできるだけ事前申込みをお願いします。

#### 申込み方法

吉岡秀樹宛

本通信 56 号の参加申し込み用紙を使用するかメールで申し込む。

### ○自家用車利用の方へ

必要スペースを事前に会場校に連絡しなければなりません。申込用紙にその旨記載を。

### ○宿泊について

各自で早めに予約して下さい。

#### ホテル情報

#### <藤沢・辻堂地区のツインのホテル>

- ・ホテル法華クラブ藤沢 10,900 円 (1泊朝食) tel 0466-27-6101
- ・グランドホテル湘南 10,892 円 (1泊朝食) tel 0466-22-1311
- ・第一イン湘南 7,980 円 (1泊朝食) tel 0466-36-4411

会場へは JR 横浜駅から片道約 45 分ですから横浜駅付近のビジネスホテル泊も可能です。また、江ノ島にも老舗旅館がありますが大型連休直前の観光地ですのでどこも割高です。

#### <江ノ島>

- ・岩本楼本館 鎌倉時代からの由緒ある旅館 tel 0466-26-4121
- ・恵比寿屋 tel 0466-22-4105

詳細は直接問い合わせをして下さい。

### ○湘南集会 問合せ先

担当 吉岡秀樹 〒 286-0834 千葉県成田市和田 141

携帯TEL 080-5513-7413

TEL・FAX 0476-22-4190

e-mail hyoshi141@hb.tp1.jp

## 藤岡貞彦・岩田好宏対談「生きることと学ぶこと」

### <対談の流れ>

- ・二人の紹介と対談企画の意図について（司会者から）
- ・対談（大きな流れは1から6の順、1テーマ15分）
- ・フロアからの発言

### 1. 岩田から藤岡へ「三島・沼津の化学コンビナート計画反対運動について」

先生は、「三島・沼津の化学コンビナート計画反対運動」との出会いから、公害教育へ、さらにそこから環境教育へと、新しい教育領域を開拓されたと理解しているのですが、どのような問題意識から、教育についてのこのような構想をもたれたのか、おうかがいしたいと思います。

### 2. 藤岡から岩田へ「教科教育について」

湘南学園の伝統ある一貫教育は、三つのEを目標にしている様に見えます。即ち、Environmental School, Ecological School, Education for Sustainable Development の3つのEです。理科教育のお立場からどのように評価されますか。

### 3. 藤岡から岩田へ「大田堯著『教育とは何か』について」

先生は、大田堯教授の教育学が、立論の基礎として生物学に接近し、生物学に依拠し、その結果、岩田先生を頼りにしておられる様にお見受けします。何故でしょうか。

### 4. 藤岡から岩田へ「教育的指導と本学びについて」

先生は長い高校教師としてのお立場から「本学びの学習論」を提起され、私たち教育学研究者に深い示唆を与えて下さいました。どういうお立場から、こういう見地に立たれることになったのでしょうか。

### 5. 岩田から藤岡へ「宮原誠一教授の教育学について」

先生が本格的に教育学研究に取り組もうと思われた頃は、東京大学教育学部には、何人も巨人のような先生方がおられたと聞いていますが、なぜ宮原誠一先生を選ばれたのでしょうか。

### 6. 岩田から藤岡へ「ポストチェルノブイリ段階について」

私は、「広島長崎時代」という歴史観はもっていたのですが、先生の「ポストチェルノブイリ段階」というお考えに接した時に、強い衝撃を受けた記憶があります。どのような歴史感覚からこのような時代区分をされたのか、おうかがいします。

藤岡貞彦 略歴、主な著書、編著書

1935年東京生まれ、東京大学教育学部卒、一橋大学名誉教授、元湘南学園長  
本学会会員、環境教育学、社会教育学、教育社会学

著書『教育の計画化』総合労働研究所、1977年

『社会教育実践と民衆意識』草土文化、1977年

編著書『現代企業社会と生涯学習』大月書店、1988年

『<環境と開発>の教育学』同時代社、1998年

岩田 好宏 略歴

1936年東京生まれ、東京教育大学理学部卒、もと千葉県立千葉高等学校教諭  
本学会顧問、生物教育、環境教育、地域自然史

著書：『生物学教育入門』新生出版、1979年

『オスメスから男女への歴史』新生出版、1980年

『「人間らしさ」の起原と歴史』ベレ出版、2008年

『植物誌入門—多様性と生態』緑風出版、2010年

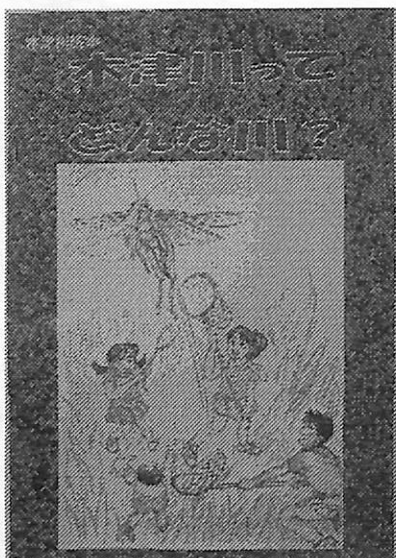
『環境教育とは何か』緑風出版、2012年

編著書『林淳一自然科学・教育論 人間は自然をどうとらえてきたか』  
日本標準、2009年

『野生生物保全教育入門』少年写真新聞社、2006年

『野生生物保全事典』緑風出版、2008年

『子どもと自然大事典』ルック、2011年



木津川読本いよいよ出来

『木津川読本 木津川ってどんな川？』が発刊される  
とのこと。木津川は京都の南を流れる淀川水系の一つ。  
源流は三重県伊賀地方。会員の野村治さんたちが参加す  
る「やましる里山の会」が制作。1万部作成して小中学  
校へ配布される予定。

週刊で通信を発行。現在までに501号が出されている。  
やましる里山の会 の事務局とHPは…。

〒 610-0331 京都府京田辺市田辺深田15

電話：0774-64-4183

<http://www.yamashiro.npo-jp.net/fddb257@ybb.ne.jp>

**2014年度 湘南集会（思いを語る会）  
参加申込用紙 4月12日締めきり**

シンポジウムや懇親会の会場準備のために、できるだけ事前申込みをお願いします。もちろん事前申込みなしの当日参加も大歓迎です。  
(本用紙FAXかEメールで申し込む)

氏名		都道府県名		
住所 連絡先	〒 ー			
Eメールアドレス				
電話番号		会員 非会員 ○を	一般 学生 高校生	
参加有無	シンポジウム (藤岡・岩田対談)	参加	不参加	未定
	懇親会(要 別途会費)	参加	不参加	未定
	27日(日) 思いを語る会	参加	不参加	未定
会場校への車の乗り入れ		予定している	予定していない	

参加申し込み先/問い合わせ先

吉岡秀樹 FAX・tel 0476-22-4190  
Eメール hyoshi141@hb.tp1.jp  
携帯tel 080-5513-7413

■ 2013年12月1日、子どもと自然学会第20回京都山科大会で「子どもと自然学会の10年 これまでとこれから」という話し合いの場が持たれました。学生さんや若い会員の発言で“これから”が少し見えてきました。

①学生交流集会へかなりの援助が必要である。そのためには、理事会と学生交流集会とを同時に開催するような大会スケジュールではいけない。

②若い会員の中には教職に就いたばかりの人が何人かいる。その人たちは教育実践に関わる要求が多くある。その人たちのために応えていく必要がある。

③ホームページの開設が待たれるという意見が多かった。(これは2014年2月に再開することができた。)

以下は20回大会で配布されたものである。資料的価値を認め通信に掲載しておく。

#### 資料①／

子どもと自然学会設立10年(2003年11月～) これまでとこれから

### 研究活動に関して

研究推進担当 石渡正志

本学会は、「子どもと自然のゆたかなかわりの実現」を目指し、これまでのように特定の教科や領域から子どもと自然の関係を見るだけでなく、多方面からの研究成果や実践を持ち寄り、子どもにとって自然はどのような意味をもつのかという点について総合的に明らかにしていこう、そして現状の問題を解決するための方法知を探ろうという目標を持ち、多様な人たちが集まって設立された。

これまでの研究テーマの例としては、学校教育の中で自然を扱う意味、子どもの自然体験の実際、子どもの自然への関わり方、子どもの視点からの地域創生、子どもの自然認識の発達とカリキュラム、子どもと農業・漁業などがある。

(※学会誌、研究大会等で発表されたテーマについては2008年(学会誌10のp244-248)に岩田氏がまとめている。)

年2回の研究大会を全国各地で開催し、研究を深めた。また地元で自然体験活動などを行っている方々から具体的な取り組み方を学んだ。

2011年には、これまでの研究成果をまとめるため100名以上が執筆参加して『子どもと自然大事典』(出版元:(株)ルック)を刊行した(内容項目は別記の通りである)。

#### <研究成果>

1. 自然体験や自然・理科・環境教育に関する実践が蓄積された。
2. 子どもと自然に関する理論についていくつか提案された。
3. 生物教育研究委員会が継続的な研究を行い、「人間と生物世界」学習の

指導計画案を発表した。

4. 『子どもと自然大事典』(出版元：(株) ルック)を刊行した。

#### <課題・展望>

1. 実践を総合的に分析し、理論化する作業が必要である。  
例えば、子ども事典を評価、分析することで具体的な課題が浮かぶだろう  
(項目の過不足や関連性の検討など)
2. 提案された理論について集団的に検討、深化する作業が必要である。  
研究大会での提言の討論会の実施など
3. 新たな専門委員会、研究グループの設置を期待する。  
子どもの環境意識調査グループ  
国内・国際的動向調査グループなど
4. 研究成果を基にした提言が行えるようにしていくべきである。
5. 研究大会において研究の深化、発展を目指す。  
各大会時に課題研究ワークショップの設置を検討する(数回同一テーマで継続)。
6. 若手ゼミに多くの学生が参加し、研究者としての力をつけられるようにしていく。

#### 『子どもと自然大事典』内容項目

<序章>子どもと自然、その支える人たち

<第1部>子どもと生き物

1章) 子どもと生き物、2章) 子どもとほ乳類、3章) 子どもといろ  
いろな動物 4章) 子どもと植物、5章) 子どもと生き物

<第2部>子どもとモノ

1章) 子どもと道具、2章) 子どもと地球、3章) 子どもと宇宙・物質  
4章) 子どもと自然

<第3部>子どもとは

1章) 子どもと生活、2章) 子どもとからだ

<第4部>子どもと学校

1章) 小学生と自然の学習、2章) 中・高・大学生・障がい児と自然  
の学習 3章) 自然・自然科学の学習

<第5部>子どもと自然、社会

1章) 子どもとおとな、2章) 子どもと都市・農村、3章) 地域活動  
と子ども、自然 4章) 子どもと動物園、博物館など、5章) 子ども  
と科学・文化

<終章>子どもと自然学会顧問との対談



## 資料②／

# 子どもと自然学会設立 10 年（2003 年 11 月～）これまでとこれから 集会等に関して

集会等担当 吉岡秀樹

## 1. 研究大会、思いを語る会の経過

### (1) 研究大会

会則第 3 条(活動)「この会は、目的達成のために次のことを行う。a. 研究発表会、講演会・シンポジウム・討論会など各種集会、調査・研究活動、野外活動など」に基づき設立時から今日に至るまで、原則として春と秋の 2 回、研究大会を開催し、2013 年 5 月千葉市大会で 19 回を数えるに至る。2008 年だけ 1 回（北海道・釧路大会（第 10 回）（8 月 27 日～31 日）の開催だった。

#### (a.) テーマと参加者数、一般発表数

第 1 回 子どもにとって自然とは（2003・11 市川大会・和洋女子大）設立総会（40 名）シンポジウム（大人 40 名と小高生 7 名）フィールドワーク 大会参加者 52 名（会員 38 名非会員 14 名）

第 2 回 「子どもにとって自然とは」を、その基本から問い直す（2004・5 岐阜大会・岐阜大）シンポジウム（40 名）フィールドワーク（子どもと親含め 150 名）

第 3 回 子どもの遊び事情・育ちの場と自然（2004・10 市川大会・和洋女子大）シンポジウム（47 名）一般発表（19 本）フィールドワーク

第 4 回 今の自然環境と子どもの暮らし、大人の自然離れにも目を向けよう（2005・6 京田辺大会・同志社大）シンポジウム フィールドワーク（子どもと親含め 130 名以上）

第 5 回 子どもの目の色が変わるとき（2005・10 つくば大会・産業技術総合研究所）一般発表（33 本）フィールドワーク（60 名子ども含め 100 名）

第 6 回 北の庄沢・その周辺の地域づくりと子ども（2006・6 近江八幡大会・八幡公民館）シンポジウム（60 名そのうち学生は 30 名）フィールドワーク（30 名）

第 7 回 都市に残る緑と子ども（2006・11 さいたま大会・埼玉大）シンポジウム（59 名そのうち会員 25 名非会員 10 名学生 18 名他 6 名）一般発表（19 本）フィールドワーク

第 8 回 子どもと地域と食と農（2007・6 明日香大会・飛鳥寺研修所）シンポジウム（20 数名）フィールドワーク（20 数名？）

第 9 回 子どもの自然体験が拓くもの（2007・11 多摩大会・東京学芸大）シンポジウム（約 40 名）一般発表（パネル発表含め 17 本）フィールドワーク

第 10 回 豊かな自然と地域・学校・子どもの人格形成（2008・8 北海道・釧路大会・北海道教育大）シンポジウム（約 50 名）一般発表（18 本そのうち学生・院生 10 本）フィールドワーク（釧路湿原 22 名）第 1 回学生交流集会（20 名そのうち北教大 12 名、埼玉大 3 名、元学生 5 名）

第 11 回 子どもの自然体験を支援する（2009・5 長野・飯山大会・なべくら高原森の家、

信州大) シンポジウム (53名) フィールドワーク (43名) 第2回学生交流集会 (20名 3大学15名、元学生5名)

第12回 あえぐ学校・子ども・自然 (2009・12 京都山科大会・京都橘大) シンポジウム  
一般発表 (28本そのうち学生・院生17本) フィールドワーク 第3回学生交流集会  
(41名?) 大会参加 76 (一般35 学生41)

第13回 水と森、そして人々の暮らし (2010・5 岐阜徳山大会・ふじはし星の家) シン  
ポジウム (約40名) フィールドワーク 第4回学生交流集会 (17名?) 大会参加 42  
(会員・一般25 学生17)

第14回 若者と自然 (2010・11 市川・若者大会・和洋女子大) シンポジウム (約80名)  
一般発表(35本そのうち学生・院生18本) フィールドワーク (約50名) 第5回学生交  
流集会(47名) 大会参加 82 (一般会員31 非会員4 学生47名 11大学)

第15回 都市の自然環境での子どもたちの学びと育ちを考える (2011・5 名古屋大会)  
シンポジウム フィールドワーク 第6回学生交流集会

第16回 海・山・町と人との関係を問いただす (2011・11 神戸大会) シンポジウム 一  
般発表 (35本そのうち学生18本) ポスター発表 (18本そのうち学生17本) フィールドワ  
ーク 第7回学生交流集会

第17回 原発・放射能汚染と子ども・地域 (2012・6 福島大会) シンポジウム (約70  
名) フィールドワーク (約50名) 第8回学生交流集会 (約30名) 大会参加 73 (一般45  
学生・院生28)

第18回 どうする自然離れ (2012・11 長野・飯綱大会) シンポジウム 一般発表 (48本)  
フィールドワーク 第9回学生交流集会 (51名 4大学)

第19回 子どもはどんな学びを求めているか (2013・5 千葉市大会) シンポジウム フ  
ィールドワーク 第10回学生交流集会 ( 名 大学)

-----  
第20回 子どもの育ちと自然とのかかわりを探ろうー乳幼児期から小学校低学年までを  
視野に (2013・11,30~12.1 京都山科大会) ワークショップ/ポスターセッション  
シンポジウム 一般発表 子どもと自然学会の10年これまでとこれから・総合討論  
第11回全国学生交流集会 ( 名 大学) 大会参加 166人。(実行委員会で毎回学習会  
を行った。)

(b.) 都道府県ごとの開催数と開催会場

千葉県 (市川市和洋女子大3回 千葉経済大学附属高校) 4回

岐阜県 (岐阜大学 徳山・ふじはし星の家) 2回

京都府 (同志社大学 京都橘大学) 2回

長野県 (信州大学・飯山市なべくら高原「森の家」、信州大学・飯綱高原) 2回

茨城県 (つくば市産業技術総合研究所) 1回

滋賀県 (近江八幡市・八幡公民館) 1回

埼玉県 (埼玉大学) 1回

奈良県 (明日香市・飛鳥寺研修所) 1回

東京都 (東京学芸大学) 1回

北海道（北海道教育大学釧路校）1回  
愛知県（名城大学）1回  
兵庫県（甲南女子大学）1回  
福島県（福島大学・福島総合運動場）1回

## (2) 思いを語る会

これも会則第3条に基づいて開催された。

- 第1回 2005年5月 長野 千曲市 千曲川でのフィールドワークと連談（20名）  
第2回 2005年12月 奈良 奈良教育大学 （5名）  
第3回 2007年4月 静岡市 ホテルよしみ 登呂遺跡フィールドワークと思いを語る  
（15名）  
第4回 2008年2月 京都 京都橘大学 本作り（10名）  
第5回 2008年12月 東京 新大久保 子どもと自然について思いを語る（15名）  
話題提供 安藤聡彦 関さんの森を残す取り組み。  
第6回 2010年4月 岐阜 岐阜羽島かんぼの宿 子どもと自然について思いを語る。  
（名）

学会誌、秋の東京大会について  
付；第2回思いを語る会以降 その中で理事会も開催することとした。

## 2. 研究大会のこれまでとこれからについて

2008年12月に存続可否検討の中で岩田好宏さんの提案（第1回～10回までを振り返って）をもとに論議した内容を足がかりにして課題などを考えてみた。

### (1) 研究大会のあり方を考えるために

<大会の開催形式>

- (a) 初夏の大会：フィールドワークとシンポジウム 学生交流集会（第10回大会以降）  
総会（第13回大会以降）  
(b) 秋の大会：フィールドワークとシンポジウム、研究発表（釧路大会は別）学生交流集会（第10回大会以降）として定着してきている。  
今後この形態を原則として開催していったらどうか。

<大会のテーマについて>

- (a) テーマを決める手続き  
i. 第1回～第3回は、理事会で検討して決めた  
ii. 第4回以降第19回に至るまで、大会開催地の実行委員会が決めた。ただし、実行委員には理事も入っていた。  
テーマ決定に際して理事会が開催地の実行委員会とどのように連絡をとり、かかわっていくのが今後の課題となる。

(b) テーマそのものについて

- i. 近江八幡大会とさいたま大会は、地域独自のテーマにした。
  - ii. 京田辺大会では、子どもだけでなく、大人の問題も考えた。
  - iii. 第1回～第3回では、基本的なこと、他の大会では具体的、個別的な問題。
  - iv. 年2回の大会は、初夏の大会では地域性を、秋の大会では本質的なものをと（2008年に）確認したがそれを意識したテーマ設定とはならなかった。
- (c). テーマをより深めることについて
- i. 第17回福島大会や第18回長野・飯綱大会などではテーマと関連したフィールドワークが実施されて、テーマをより深めることができた。
  - ii. 学生交流集会では毎回、大会テーマに準じた内容での話し合いがされ、全体会でも話し合いの結果が報告された。このことによって学生交流集会に参加した学生だけではなく全参加者が大会テーマを深めることが出来た。

#### (2) 開催地について

東西に偏ることなく実施してきたが北東北、北陸、九州、中国、四国、沖縄での開催も視野に入れたい。ただ、そのためにはその地に会員をどのように拡大していけるかが関連してくる。

#### (3) 学生の参加について

第10回大会（釧路大会）以降、大学関係者を中心とする取り組みで大学生の参加が飛躍的に増えた。また、その後、継続して開催されている学生交流集会に見られる様に学生の主体的な参加と活発な交流も進んでいる。

現在、学生の研究発表は増え、どの大会でも一般発表数の半数に達している。

#### (4) 実行委員会の構成

「これまでは、開催地の会員と理事会の担当者によって構成したが、実質的には開催地会員中心となった。一つの考え方として、理事に地区担当者をおいてはどうか。大会開催の時に実行委員会に実質的に加わる」（2008）の考えもあったが、第11回大会以降も開催地周辺の理事・会員が中心となり、実行委員会を構成して企画・運営に当たってきた。

#### (5) 子どもと自然にかかわる団体との連携やその後の交流

研究大会開催地には必ずといって良いほど「子どもと自然」にかかわる団体があり、その多くには会員がかかわっていた。また、これらの団体の協力を得て大会を成功させることも多々あった。しかし、こうした団体とのその後の連携・交流は十分ではない。

### 3. 思いを語る会について

2005年にスタートした思いを語る会は2010年で休止している。当初、「子ども」「自然」「子どもと自然学会」に対する「思い」を何でも語りあおうとして始まったものだったが、拡大理事会を兼ねたり、当面の課題を話し合うことが主になっていく中で、その必要性も薄れていった様に思える。2008年12月の存続可否検討の討議の中では『『思いを語る会』では思いを語ることを重視したい』という意見が出されたが、今後の会のあり方については、その存続も含めて検討する必要があると思われる。

資料③／

子どもと自然学会設立 10 年（2003 年 11 月～）これまでとこれから  
**事務局体制に関して**

事務局長 生源寺孝浩

**（１）組織に関すること**

**1) 過去 10 年の会員数や内訳・構成**

①子どもと自然学会が始まる時、すなわち、子どもと自然教育学会（仮）のとき（2003 年から 2004 年頃）の会員数

全体では 105 名（うち 男；83 / 女；22）

所属別では

不明 6 / 一般 17 / 学生 4 / 教員：小学校 30 / : 中学校 12 / : 高校 21 / : 大 13 / : 養護学校 2

② 2013 年 5 月 7 日現在の会員状況

全体では 181 名（うち 男；120, 女；61）

所属別では

一般 11 + 30 (30 内訳：元小学校 14, 元中学校 4, 元高校 7, 元大学・研究所 5) / 教員：小学校 25 / : 中学校 11 / : 高校 11 / : 大学 29 (うち元小中高 11) / : 養護学校 1 / 小学生 1 / 学生 11 / 大学院生 4 / 顧問 5 / (父母 1)

会員の現在の所属・年齢構成・退職後、どのようなことをライフワークとしているか等、再調査の必要がある。事務局では会員の所属を全て把握できているわけではない。

**2) 会費納入状況から見た課題**

■ 2009 年度に納入された会費

06 会費 2 人, 07 会費 8 人, 08 会費 20 人,

09 会費 97 人 (10~126, 500 円)

■ 2010 年度に納入された会費

07 会費 18 人 08 会費 28 人 09 会費 22 人

10 会費 88 人

■ 2011 年度に納入された会費

07 会費 1 人, 08 会費 2 人, 09 会費 10 人, 10 会費 24 人,

11 会費 103 (一般 93 人, 学生 10 人)

■ 2012 年度に納入された会費

92 人 (一般 88 人, 学生 4 人) (会費会員数 170 人) 納入率 54.4%

会費納入状況が事務局の督促に応じて加減している。  
会費の単年度納入額で単年度決算が出来ていない状況がある。

### 3) 全ての会員が所属感をもてる学会にするために

学会誌や通信の内容に多様性を持たせる。現場の実践をもっと載せられるように間口を広くする努力をする。その日常的な取り組みはいかにあるべきだろうか。

また、自分が「子どもと自然学会」に所属しているという自覚を持ってもらうことも必要だろう。

## (2) 通信に関すること

### 1) 編集、内容について

会員の声や日常の小さな実践の掲載にも力を入れたい。ではいかにして原稿・版下を集めるかである。

[方法その1] 理事の力を借りる。各理事に会員の声や日常の小さな実践を書いてもらう。自分が書かなくても、身近にいる会員に書かせて事務局へ送るのもよい。

[方法その2] 会員に直接原稿依頼を行う。そのためには本人宛のメールアドレスを全部調べる必要がある。

### 2) 発行形態・回数は

現在は偶数月の第四週の土日に発行するのを原則にしている。しかし、発行事務を生源寺孝浩が一人で行っていたので、翌月の初めになることもあった。回数は年に6回ということで予算化もされている。

### 3) 通信発行事務

通信をホームページに掲載して印刷発送の数を減らすことにしたい。総会で議論することになる。それまではホームページにも掲載するようにしたい。

三上さんの援助で印刷・製本の作業も一人でしていたときよりも格段に楽になっている。

## (3) ホームページに関すること

事務局の三上さんが2014年2月にHPを再開してくれた。URLは <http://kodomotosizen.jimdo.com/> です。一度覗いてみてください。

## (4) 会員名簿に関すること

会員名簿は作った方がよいか。

---

---

# 映画『永遠の0』批判

加藤 久雄 (会員)

---

---

## (1) 序論

### 1 はじめに

映画「永遠の0」を観に行った人が身近にもかなりいます。平和・人権・民主主義を求める活動をしている何人もの方から、「よかった、涙が出た、感動した、そう悪い映画じゃない」と聞きました。中には、「百田尚樹のものは絶対に読まない、映画も観に行かない」という剛の者もいます。私もその一人でしたが、「誰かがきちんと批判しなければ…」との思いで観に行きました。

はっきりと言います。「あんな映画に感動しているようでは、おれたちの抵抗力、批判力、だまされない力は相当に劣化している。そんなんで、平和・人権・民主主義を守れるのか！戦争への道にストップをかけることができるのか！」。こう書くと、世の中には臍曲がり(?)の人もいますから、「やっぱり観に行ってみようかしら」と思う方もいらっしゃるかもしれません。だめですよ行っては！

百田尚樹のものは「読まない、観ない」が一番の抵抗なのですから…。「それでも行きたい」という方は、わたしのようによく批判して下さい。無視しないで徹底的に批判して、葬り去る。そういう行動をちゃんとしていって下さいね。

以下は、「哲学カフェ」通信第69号に書いたものです。紙面が少なかったので、「永遠の0」批判の序論です。ご意見・ご感想を頂けるとうれしいです。

### 2 お薦めしたくないこの一冊・この一本

いつもは、「お薦めの本・映画」を掲載してきましたが、今回に限り、「お薦めしたくない」にします。原作は200万部、映画は500万人を越え、歴代興行成績のベスト10どころかベスト5にも届きそうだという。この『永遠の0』現象とも言うべき事態をどうみたらいいのでしょうか？

安倍総理は軍国主義者(本人が言っています)、ファシスト、国粹主義者、歴史修正主義者です。安倍総理の「お友達」の百田氏も根っこのところは同じです。百田氏の数々の暴言。NHK経営委員不的確どころか社会人としても失格です。それなのに、「私は言論封殺と断固戦う」と強気な姿勢を崩していません。これだけ本が売れ、映画の観客があれば、「恐い者なし」なのでしょう。ということは、本を買って読んだり、映画を観にいった人は、ファシストを支

え加担してしまっていることになります。

「戦争を美化していない。特攻を批判している」という感想を言う人が多いですが、本当にそうでしょうか？ あの映画は、夫婦愛・家庭愛・師弟愛（これらが本物の“愛”といえるかどうか？）などを絡ませながら、主人公の特攻の一隊員を極めてカッコよく、英雄的に描いているだけの映画です。大状況である「戦争」への根本的な批判は全くありません。（これがあつたら「防衛省」は協力しないでしょう）

戦争は絶対的な「悪」です。戦争を美化・賛美・肯定・協力するか断固として反対するか、立場はこの二つしかありません。中間的な立場などないのです。

“反戦映画”でも“好戦映画”でもない映画はないのです。この映画は、「断固として戦争に反対する」立場で描かれていないということによって、戦争への批判力、抵抗力を劣化させるという役割を果たしています。そのことによって「戦争への道を開く映画」です。

そもそも実社会で戦争を美化・肯定する者に、真に戦争を批判する作品が描けるのでしょうか？ わたしは、そんなことはありえないと思います。井上ひさしさんは、「太鼓たたいて笛拭いて」の上演前のTVインタビュー（2004年）で、作家と作品について次のように語っています。

「石川啄木、宮澤賢治は作品自体もいいんですが、生き方と作品が重なって、ああこれは日本人の共通の財産で貴重な遺産だなという思いは強くなっています。林芙美子さんもそうですね、生き方と作品を重ねて把握していくことが日本人であることの喜びですね。日本人だから読める、日本の歴史の中で生きているからジーンとくる。日本を愛するとはそういうことなんじゃあないか」

## (2) 本論

— 悪魔は静かにノックし破滅へと誘う —

— ファシストは「美しい」言葉とウソと秘密で戦争を始める —

### 1 『偽りの映像—戦争を描く眼』(山田和夫著、1984年、新日本出版社刊)を手に取る

『永遠の0』現象に接して、書棚からすっと取り出しのが、この本です。30年前の本ですが、その内容は今でも色褪せないどころか、多くの示唆に富んでいます。下手にまとめるより、本文をそのまま伝えたほうが『永遠の0』現象を観る眼を鍛えてくれるでしょう。以下、多くはこの本からの引用で書き進めていきます。

### 2 『偽りの映像—戦争を描く眼』を読む



はじめに＝わたしにとっての戦争と映画

- 1 戦後日本映画は平和を訴え続けた
- 2 日本映画の逆流がはじまった
- 3 1980年代・映画「右傾化」の新しい顔
  - (1)戦争は「愛のドラマ」になった？—「動乱」の描いた“愛”
  - (2)“戦争はカッコよく、おもしろい”—スポーツ化・ゲーム化・娯楽化
  - (3)“だれも戦争をやりたくなかった！”—戦争＝宿命論のテクニク
  - (4)“生か死か、殺すか殺されるか”—「小状況＝極限状況」を悪用する戦法
  - (5)“山本五十六は「平和主義者」だった”—「海軍＝善玉論」などのまやかし
  - (6)“みんな人間なんだ”—「人間を描く」というけれど
  - (7)“日本もひどいが、アメリカも……”—「けんか両成敗論」の役割
  - (8)“諸悪の根源は共産主義”—反共主義と「ソ連脅威論」
  - (9)“事実を客観的に”—「東京裁判」の意図と結果
  - (10)核戦争を描く二つの視点—「ザ・デイ・アフター」と「198X年」
  - (11)“反戦映画”でも“好戦映画”でもない—映画批評の責任と無責任
- 4 映画を平和の力に！—結びにかえて

あとがき

## 《2》見出しを読む

見出しをみて、ハッと思い当たる方は少なくないでしょう。映画『永遠の0』は、(1),(2),(3),(4),(6),(11)などの手法を巧みに組み合わせているのです。著者の山田和夫さんは、(1)から(11)までを実に多くの映画作品を実例にしながら論を展開していますが、ここでは、映画『永遠の0』にかかわる箇所を中心に論を進めていきます。

## 《3》「はじめに」より

「たとえ真実であったとしても、主観的な「純粋さ」など何の価値と意味を持ち得よう。何も知らず、正しいと信じ、祖国のためと思い込んで戦争に参加したとしても、その戦争が侵略戦争であるならばやはり加害者の一員としての責任は免れることが出来ない。それだけではない。「戦争と平和」(山本薩夫監督)は加害者である日本の国民は同時に被害者であることを明らかにした。侵略国の国民は道義なき侵略国の国民であるが故に、非道な国の支配者によって惨苦をなめざるを得ない。国民は加害者であることへの深い反省の上に立ち、他国に害を加え、自国民をも苦しめたものをつっかりと見すえなければならない。」(P.16)

\*映画『永遠の0』には、戦争の加害が全く描かれていないという批判があります。

軍国主義者である百田氏が加害を描くことができないのは、当然のことでしょう。

## 《4》「日本映画の逆流がはじまった」より

「警察予備隊」が出来ると、東横映画(のちの東映)はいち早く警察予備隊のPR映画「この旗に誓う」を製作した。1950年代後半から60年代にかけてふえてくる自衛隊とのタイアップ映画の、これははしりであった。太平洋戦争が終わってわずか5年、再び戦火が間近なところで燃え上がり、改めて反戦平和の声が高まっていたとき、早くも「反共」のための再軍備に同調する日本映画があらわれたことは重大であ

った。その傾向に池田・ロバートソン会談の合意が拍車をかけた。」(P.33)

「試写(「予科練物語・紺碧の空遠く」(1960年、井上和男監督)を見た防衛庁関係者「自衛隊員の士気をそこなう」とカットを要求、実行させた。防衛庁は「戦争映画協力基準」にもとづき、「自衛隊員の士気を鼓舞する」映画という条件で撮影に協力したというのである。私たちはこの事件ではじめて、防衛庁が自衛隊の戦車や飛行機などの兵器や兵員を撮影に使わせる「基準」のあることを知った。そして、この「基準」を守る映画には、製作費に換算すると莫大な額になる全面協力を惜しまないことが、つぎつぎと作品で実現されていく。」(P.36)

「(1962年11月、テレビドラマ「ひとりっ子」)放映直前にスポンサーの東芝が放映中止を申し入れ、このドラマは陽の目を見なかった。その後、東芝の申し入れには防衛庁と右翼、さらに自民党幹部の圧力があつたことが判明している。」(P.37)

「万感の思いを込めたラスト・カット。(「あゝ同期の桜」(中島貞夫監督)一学徒出陣で特攻隊員として死んでいった青春への挽歌といえる作品一)それに東映の大川博社長(当時)は激怒した。公開4日目から社長命令でつぎのタイトルが追加される。

「だが、この犠牲によって、今日の平和と繁栄がある一大川博」。もうそのラスト・カットに込められた思いすら、そのままでは許されないところまで、映画資本の意志は支配層の意志に寄りつつあつた。」(P.38)

「その多元的・複合的な劇構成は、戦争責任を拡散させ、霧消させ、みんなが国を愛し、国に殉じたというイメージをまとめるのに有効となる」(P.42)

\*これらの逆流は、次に見るように、1980年代に入り「右傾化」の新しい顔として強まってきます。映画だけでなく、新聞・テレビなどのマスコミへの介入・統制も同時進行で強められてきます。この延長線上の映画が『永遠の0』なのです。支配層による「逆流」が、まるでボディブローのように効き、私たちの「戦争への批判力・抵抗力を奪ってきた。その結果が『永遠の0』現象を生みだすまでになってしまった」。これが現在の姿ではないでしょうか?

## 《5》「戦争は「愛のドラマ」になった？」の章より

この章では著者は、「動乱」に焦点を当てながら、「二百三高地」「連合艦隊」「大日本帝国」などの映画が、「愛のドラマ」「愛と青春」をセールスポイントにし、「二百三高地」は「若い世代(24歳以下)が観客の三割を越え、「動乱」以上に低年齢層への広がりが見られた。」(P.63)と書いています。

そこで著者は、「では果たして、そこでうたわれている「愛」は真に“愛”の名にふさわしく、「ドラマ」は“ドラマ”といえる真実の葛藤をとらえていただろうか？」

(P.60)と問い、「そこには真の「愛のドラマ」は存在しなかった。逆に映画に登場する「愛のドラマ」の真偽を見分けることで、その映画が歴史と人間の真実を描いているかどうか、判別することが可能なのである」(P.65)と答えています。

新聞の映画案内の欄では、『永遠の0』の上映時間と共に「愛の物語」と書かれています。30年前の手口の再現です。その手口にまんまと乗せられてしまっている現状は、30年前以上に深刻であり、ファシストが跋扈し戦争前夜の様相を呈しています。私たちの「批判力、抵抗力、だまされない力」が、かつてなく試されているので

す。

## 《6》「だれも戦争をやりたくなかった！」—戦争＝宿命論のテクニク」の章より

「日本のいちばん長い日」の場合は、「多元的・複合的」といっても前記特攻隊員のエピソードを除くと、ほとんどが天皇と上層部に登場人物とドラマが集中しているが、「二百三高地」などはかなりの比重で貧しい一般国民の悲劇的挿話を描くことで、侵略免罪の本音をおおいにかくすのにより効果的な仕掛けになっていることが注目された。ますます“だれも戦争をやりたくなかった”という、戦争＝宿命論が生きて来る。また「多元的・複合的な劇構成」のおかげで、いろんな階層、さまざまな関心にどこかで対応する多様な物語が同時進行する。いふなれば、すでに指摘した「多様な価値観」が存在する状況を前提とした上で、いかにして祖国のための献身、「滅私奉公」という「単一の価値観」を押しつけるか—その目的にもっとも有効なドラマの仕組みでもあるし、80年代「右傾化」映画の新しい特徴がそこにも見られるといえるだろう。」(P.83)

\*『永遠の0』の場合は、「祖国のための献身」ではなく、「愛するものを守るため」という描き方をしています。そこが、観た人の涙を誘うのでしょう。特攻隊員は何らかの理由付けをしなければ、無謀な特攻に行けるものではありません。「愛するもののため」という理由付けは、老いも若きも引きつける巧妙な手口です。問われるべきは、軍部の作戦と体質であり、その戦争責任であることを忘れてはならないでしょう。

## 《7》「生か死か、殺すか殺されるか」—「小状況＝極限状況」を悪用する戦法—」の章より

「ここまで、戦争を小状況＝極限状況にしぼり込むと、そこに登場する人間にとって残された選択肢は「生か死か」「殺すか殺されるか」しかない」(P.88)

「第二次世界大戦がナチス・ドイツの側からする侵略戦争であり、Uボートがその凶暴な武器であったことは変わらない。「生か死か」「殺すか殺されるか」の小状況＝極限状況をクライマックスとして、劇的葛藤をそこにしぼり込めば、どちらが侵略者であり、Uボートの本質は何か？など、すっぽりと抜け落ちてしまうのである。全然「好戦的」ではない顔をして、戦争の真実をおおいにかくし、ごまかしてしまうことになる。ここに「状況＝極限状況」を利用する戦法の狙いがある。」(P.89)

「その生還への苦闘がラストの撃沈で一切無となる「戦争のむなしさ」についていえば、その程度の「むなしさ」は、だれの目にも明らかな娯楽本位の戦争アクション映画にさえ、いまではつき物になっていて、それだけで反戦の役割を果たすことは出来ない。」(P.91)

「戦争の大状況を図式的にとらえて、抽象的にその戦争が侵略戦争であるかどうかを描こうとしても、一つ一つの小状況がキチンとリアルにとらえられ、積み上げられていなければ、感銘の希薄な教条的説教となって、人の心をとらえる力を持たないが、その戦争の本質(大状況)を見すえた視点、姿勢が欠落すると、小状況は本質を見あやませる作用としてしてしか機能しない。」(P.92)

「小状況＝極限状態」を通じて戦争を描く方法は、その「小状況＝極限状態」、つまり部分が全体のための部分、いかえれば普遍的本質の貫く個別であって、はじめて戦争全体の真実に迫り得る。そうでないと、逆に戦争の真実を見えなくする機能しか持たないのである。その「小状況＝極限状態」（つまり部分、細部）がいかにか「戦争のむなしさ」や「戦争のむごさ」を訴えているように見えても、それだけでは決して戦争の真実を伝える保証にはならないことは、「Uボート」や「二百三高地」「海ゆかば」など、無数の例が教えてくれる。」(P.96)

\*多数の引用をしましたが、そのどれもが『永遠の0』に対する的確な批判になっているのではないのでしょうか？

#### 《8》「山本五十六は「平和主義者」だった」—「海軍＝善玉論」などのまやかし—の章より

「このように、山本五十六を「平和主義者」に仕立て上げ、海軍＝善玉、陸軍＝悪玉の図式をつくり、さらに陸軍の中でも「皇道派」をあたかもハト派でもあるかのように描き出し、対立した派閥「統制派」を一面的に悪玉視する—このような「右傾化」映画の戦法は、侵略戦争と軍国主義における本質的で基本的な対立を副次的で部分的な矛盾とすり替え、真の責任者をあいまいにする。前項の「小状況＝極限状態」悪玉戦法と同じく、部分によって全体をすり替えるもう一つの手法でもある。そこから生まれるのは、歴史の偽造、戦争犯罪の免罪だけである。」(P.105)

\*軍国主義者の安倍、百田氏らと映画・テレビ産業は『永遠の0』の大ヒットに気をよくして、より様々な手立てで「戦争する国を支える」国民づくりの手を打っているのではないのでしょうか？ そのような手法にだまされないための予習のような章です。

#### 《9》「みんな人間なんだ」—「人間を描く」というけれど—の章より

「山本は対米開戦を防ごうとした「平和主義者」としてだけでなく、妻にやさしく、愛人たちにも慕われる男らしい魅力の男として人間性が強調される。それに部下思いがつけ加わる。これが山本五十六の「人間性」を描くというわけだが、果たして人間を描くとはこういうことなのだろうか？」(P.107. 1983年テレビ東京の12時間超ワイドドラマ「海にける虹・山本五十六」六部作の批評)

「どんなに私生活に力点を置いて、緻密に描き上げて、その人間が社会と歴史のなかで果たしている役割が浮かび上がらない限り、人間像自体が浅く薄っぺらとなる。深い人間的真実には届かない。」(P.108)

\*『永遠の0』の主人公の描き方にもびったり当てはまるような批評です。

#### 《10》「事実を客観的に」—「東京裁判」の意図と結果—の章より

「本当の意味の「公平・中立的な客観性」というものがあり得るのか？ また小林監督がいうように「作家の主観みたいなものをすべて排除してつくる」ことが「歴史の真実を出来るだけ客観的に」描くことになるかどうか？」(P.134)

「戦争と平和の間には、「公正・中立的な客観性」という中間はあり得ないし、小林監督はこれまで明らかに疑問の余地のないほど、平和の側に立って来た作家である。その意味で「思想的な片寄りの」明白な芸術家であった。だからこそ、私たちはその

「作家の主観」が貫かれることが可能であったと信じる。あるいは、そのような「思想的な片寄り」を拒否する何かの力が働き、戦争と平和の間で「思想的な片寄りのない」つまり、反戦平和の視点があいまいとなった作品をつくり出したのであろうか？

日本映画の「右傾化」と正面切ったたかえる貴重な作家の一人として、小林監督の「東京裁判」における「意図」と「結果」の落差を心から惜しむものである。」(P.144)

\* 「戦争と平和の間には、「公正・中立的な客観性」という中間はあり得ない」。これは、心に深く刻んでおくべき言葉でしょう。

## 《11》「“反戦映画”でも“好戦映画”でもない—映画批評の責任と無責任—」の章より

「1980年代に入って、映画の「右傾化」がきわ立った姿をあらわすにつれて、映画批評、ジャーナリズムの社会的・公共的な責任感は急速に稀薄となり、その批判的機能は目に見えて衰弱して行った。」(P.155)

「私たちは映画に含まれているさまざまな要素を注意深く点検しながら、その主要な側面は何か？ を見きわめ、見定める眼力を持たなければ、狡智な支配層の詐術には対抗出来ない。」(P.162)

「“反戦映画”でもあり、“好戦映画”でもあるとか、“悪いところもある”が“いいところもある”とか、一見もっともらしい客観性をよそおっても。所詮、「右傾化」映画への判断停止を助長することで、そうした作品の意図に協力してしまうことになる。」(P.162)

「何よりも、こうした映画批評における批判的機能の衰弱、いかえれば、批評が当然持つべき社会的・公共的な責任感の希薄化には、私たちが二度とくり返してはならない侵略戦争への反省の風化が反映している。」(P.163)

\* 「批判的機能の衰弱」「判断停止」「侵略戦争への反省の風化」。耳の痛い指摘ですが、これらが相まって「永遠の0」現象を生みだしてしまったことを痛苦に反省しなければなりません。

## 《12》「映画を平和の力に！—結びにかえて—」より

「私たちはそうした批判力を強めるためには、すでに触れたように「偽りの映像」の「戦争を描く眼」の本質を見抜かなければならない。それは映画やテレビの鑑賞者である国民の映画鑑賞力をきたえ、高めることを要求するし、その要求をみたすような鑑賞の運動をぜひとも広げ、発展させることを必然的な課題とする。そういう鑑賞運動を土台にして、はじめて「右傾化」とたたかうような反戦平和の映像を質量ともに発展させることが可能になる。」(P.172)

「映像の退廃化に抗し、人間らしい人間性を守る人間愛の映像は、そのまま、映像の反動化、「右傾化」と対峙し、対決する力を持ち、発展させる。「男はつらいよ」シリーズなど、山田洋次作品は、戦争と平和の主題を直接取り上げてはいないけれども、実は想像以上に深いところで、戦争に反対し、平和を願う人間の心を広範な人びとのなかに育て上げているといえるだろう。」(P.173)

\* 山田洋次作品をこのようにとらえる筆者の「映画鑑賞力」の高さに敬服しつつ、このような「鑑賞力」を持てるようにしていきたいものだと思います。

### 3 おわりに

政治家、財界人、文化人、芸能人、ジャーナリスト、研究者などの劣化が目に見えます。

では、私たち国民・市民の側はどのようなのでしょうか？ 序論と本論で述べてきたように、私たちの批判力、抵抗力、鑑賞力、だまされない力の劣化（権力・支配層によりそのようにさせられてきた）が、「永遠の0」現象をもたらしてしまっているのではないのでしょうか？

しかし、友人の中には、「「永遠の0」のことなど話題にすることはない」、「ほっておけば、すんでしまうことさ」と言う人もいます。本当にそれでいいのでしょうか？ 私たち日本人は確かに忘れやすい。それが、権力・支配層に利用され、何度も何度もだまされ続けてきています。確かに「永遠の0」現象も一つの現象として忘れ去られていくことでしょう。だが、500万人以上の人の「戦争への抵抗力」を弱めた事実は残ります。こういうことが少しずつ積み重なって「戦争する国づくり」の準備が進められていくのではないのでしょうか？

「永遠の0」現象について黙っていることは、「戦争する国づくり」に対する日和見主義だと思います。私たちが取るべき道は、二つしかありません。

一つは、序論でも書いたように「百田尚樹のものは絶対に読まない、観ない」という抵抗を頑として貫くことです。

もう一つは、本を読んだり映画を観たりしたら、徹底的に批判することです。この序論と本論は二つ目の道のささやかな実践です。私たち一人ひとりには微力ですが無力ではありません。それぞれが自分のできるやり方で抵抗し批判する。その行動と声を大きくしていくことが何よりも大切なのではないのでしょうか？

そう言えば、もう一つの道があるようです。今、映画「永遠の0」と同時に山田洋次監督の「小さいうち」も上映されています。こちらの映画の観客数はどれほどになるのでしょうか。「永遠の0」を観て、「よかった」と言っている人に「小さいうち」を薦めたらどうでしょう。これも小さな行動ですが、私たちの「映画鑑賞力」を高めるささやかだが着実な一歩だと思います。

宮崎駿監督、井筒和幸監督のように、「永遠の0」をきちんと批判する映画人・映画評論家、ジャーナリストが増えることを願いつつ、ペンを置きます。

（加藤久雄／子どもと自然学会会員・岐阜九条の会事務局長・「哲学カフェdeぎふ」運営委員長）

（2014年2月）

## 江ノ島の地質と地震地形

玉生志郎

「第7回思いを語る会 湘南集会」(2014年4月26-27日)は、江ノ島に近い湘南学園小学校で開催されます。時間の都合上、江ノ島のフィールドワークはできませんが、参考までに、webで検索した「江ノ島の地質と地震地形」の観察地点を以下に引用します。

### 1) 江ノ島とは (Wikipediaより引用)

周囲4km、標高60mほどの陸繋島である。三浦丘陵や多摩丘陵と同様に第三紀層の凝灰質砂岩の上に関東ローム層が載る地質である。古来は引き潮の時のみ洲鼻(すばな)という砂嘴(さし)が現れて対岸の湘南海岸と地続きとなって歩いて渡ることができた。関東地震で島全体が隆起して以降は地続き傾向にある。

島の周囲は切り立った海蝕崖に囲まれ、ことに波浪の力を強く受ける島の南部には下部には海蝕台(波蝕台)が発達する。1923年(大正12年)の関東地震の隆起で海面上に海蝕台が姿を現し、隆起海蝕台(岩棚)となった。海蝕崖の下部には断層線などの弱線に沿って波浪による侵食が進み、海蝕洞が見られる場所があり、「岩屋」と呼ばれている。

### 2) 葉山層群(江ノ島南側の海食台と海食崖)(グレゴリウス工房より引用)

この付近の地層は、大変硬くハンマーでたたいても簡単に割ることができません。しかも地層の面がよく分からず、ぐしゃぐしゃになっています。大きな変動を受けたことが予想されます。しかし、よく見ると砂がちの所と泥がちのところがああります。茶色っぽいさびの色のような所も見られます。この地層からは、堆積した時期がわかるような化石が見つかっていません。逗子層の下位にあり、1500万年~2000万年前くらいに堆積したものだといわれています。この地層を葉山層群と呼んでいます。

### 3) 逗子層(東側の聖天島)(横須賀市教育情報センターより引用)

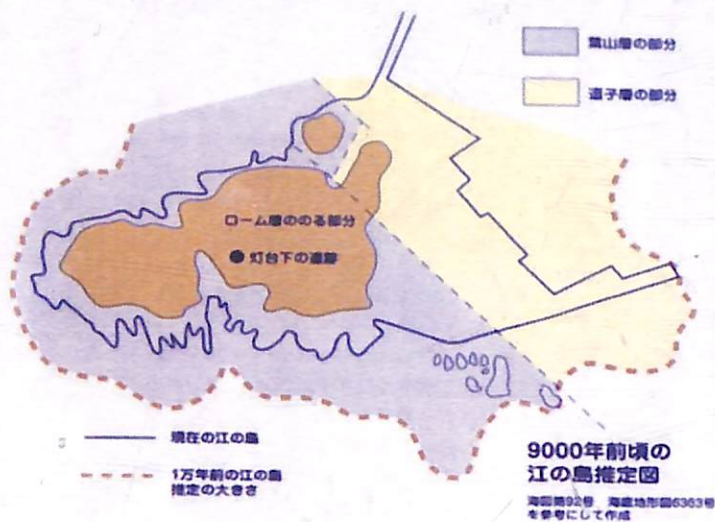
約700~400万年前に堆積した地層。主にシルト岩で砂岩をはさんでいます。また、凝灰岩をはさんでいる部分もあります。基底部は砂礫岩層で、ミウラニシキ、ズシミノガイ等の貝化石を含んでいます。三浦半島の中・北部に分布しています。

### 4) 箱根火山の堆積物(海食崖の上部)(グレゴリウス工房より引用)

数万年前の火山灰。赤土の層の中にあるオレンジ色の層は、軽石の集まった地層です。この地層は、箱根火山が噴火したときに吹き飛ばした軽石がここまで飛んできて堆積した物です。この堆積物は、陸上で堆積した物です。この層の軽石は、風化をしていて、粘土となっています。そのためこの土をとって洗い出すと、中から火山灰中の鉱物を取り出すことができます。

### 5) 藤沢市観光課『山二つ』の案内板(島の西部の尾根)(グレゴリウス工房より引用)

江ノ島をちょうど二分する境となっていることから、俗に「山ふたつ」といわれています。断層に沿って侵食された海食洞が崩落したことで「山ふたつ」が出来たともいわれています。



(グレゴリウス工房)

## 学会費納入…… と 住所変更届…… のお願い

2014年度の年会費2500円です。

通信で「2013年度学会費納入のお願い」しましたところ、118人(75.2%)の方から会費の納入がありました。ありがとうございました。

事務局からのお願いですが、2014年度があと一月ほどで始まります。何度もお願ひして恐縮ですが、'14年度会費の納入をお願いしたいと思います。

2013年度がまだという方は2013年度と2014年度をあわせて納入してくださいようお願いします。

会費の振込先：三菱東京UFJ銀行 岐阜支店 店番550

口座番号：0067796

口座名義：子どもと自然学会 会長 稲生 勝

会費 一般会員 2500円 学生会員 1000円 子ども会員 500円

## 住所変更届 のお願い……新年度が始まります。

4月から住所の変わる方は事務局まで事前にお知らせください。毎年、4月、6月には、いくつかの通信の封筒が「宛所に尋ねあたりません」と、返ってくるのです。連絡先は…

〒611-0002 宇治市木幡平尾27-480 生源寺 孝浩 宛

E-mailアドレスは shogenji@m5.kcn.ne.jp

(しよげんじ@エム5。ケーシーエヌ。エヌイー。jpです。)